

めざす児童生徒像

- ・まわりの人を思いやり、協力してよりよい社会を創る子
- ・夢や志をもち、自ら考え、挑戦する子
- ・ふるさとに誇りをもち、発展に貢献する子

※児童生徒達成結果-教員結果-保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
学校重点項目 (学校で設定)	児童生徒が主役となる学校づくり	①②③共に100%	① 学校生活が充実している。	100	94.1	91.8	94.7	93.5	93	達成率が若干下がった項目が多いが、概ねA回答が向上している様子が伺える。また、否定的回答も中間評価から減じている。これは、2学期も引き続き児童生徒主体の行事の実践や目指す姿を共有した成果と言える。特に、体育祭・文化祭において、9学年が楽しめるように、児童生徒会が中心となり、全校での行事を創り上げたことにより達成感を得られたことが要因と考える。	全体的に充足感を持ち、安定した学校生活を送るとともに、その実感を獲得している様子ではあるが、③のA回答をさらに向上させるような関わりが必要である。義務教育学校2年目に向け、子どもたちとともに成長段階ごとの目指す姿とその実現を節目ごとに確かめ、達成させていきたい。また、一人一人の心身の状態の把握に努め、有意義な学校生活を送れるように支援する。
			② 児童生徒会活動や行事に主体的に協力しあって取り組んでいる。	100	98.9		100	96.8			
			③ 学校をよりよくするために考えて行動している。	100	93.6		94.1	90.8			
			集計								
重点項目 石川県共通	業務の改善 働き方や	①を100%	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	83.3			73.7			②の結果から、前期課程・後期課程職員が丸となって学校づくりに取り組み、協力体制の構築がなされたと言える。 ①については、開校一年目の業務遂行に多くの時間を要したため、時間外勤務時間の削減と業務の平準化は十分とは言えない。	今年一年で培った義務教育学校の運営経験を生かして、業務の推進や効果的な連携を行うことで、時間外勤務時間の削減を図りたい。
			② 各部内の協力体制により、組織的に動いている。	88.9			94.7				
			集計								
			集計								
小松市共通重点項目	学校研究	④を100% 【期末の目標】 ④A評価80%以上	① 学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っている。	100			94.7			・項目④のA評価が低い。教科部会での目標設定が不十分であった。また、各教科部会で研究授業を計画的に行い事後の整理会で成果と課題、改善策を話し合うことができたが、事前研究として指導案検討や事前授業が十分行われず、教科部会としての機能が十分達成されていなかった。	・各教科部会で、それぞれの役割を明確にし、各教科の詳細な年間指導計画を作成する。 ・各教科部会で領域を絞るなど、具体的な目標を設定する。 ・教科部会をまとめるなど編成し直し、より組織的に研究を進められるよう体制を整えていく。
			② 研究主題に迫る目指す授業像(児童生徒像)を共有し、研究の視点に沿った授業研究会を計画的に行っている。	100			100				
			③ 教職員一人一人が授業研究に主体的に取り組み、自校の授業改善に向けた取組を共有・実践している。	100			94.7				
			④ 共通の方針のもと教科部会で計画的に研究を進め、目標を達成している。	100			94.4				
	指導力の向上	⑤の児童生徒を100% ⑦を100% 【期末の目標】 ③の教員A評価80%以上 ④の教員90%以上	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	95	92.5		100	90.8		【教員】 ・項目③④の発表力・記述力において、中間評価と比較してわずかな上昇がみられたが、A評価の達成率は低い。ICTの活用は図られなかった。 【児童・生徒】 ・全体的には達成率は高いが、A回答とB回答が半数ずつであり、中間評価とあまり変わらない。また、項目②⑤においては、教員と児童・生徒の意識の差が大きい。ICT活用の授業改善をしていく必要がある。 ・児童・生徒はICTの様々な機能を使えるようになった。ICTを目的ではなく手段として使っていくためにそれらを吟味し、話す力や書く力をつけ、ねらいを達成するための授業改善を研究の重点にしていく。教師の発話量を減らし、児童生徒同士で話し合い自分の考えを再構築できるような授業設計を意識した研究を学校全体で共有し、PDCAサイクルを組織的に実行し、共通理解を図りながら授業改善につなげていく。 ・各教科だけでなく、各学年の重点目標も決め、各学年で系統的につけたい力を明確にする。 ・児童生徒と教師の評価の視点を明確にする。	
			② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりしている。	100	92		100	89.1			
			③ (発表力) 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	94.7	89.3		94.1	87.5			
			④ (記述力) 児童生徒は、自分の考えを書く機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して書いている。	78.9	90.9		88.9	87.5			
			⑤ 児童生徒は、友達と話し合うとき、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて(聞いて)、自分の考えを持つことができている。	95	92		100	88.6			
			⑥ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	100	93		94.7	95.1			
			⑦ 教師の発話量を減らし、児童生徒が主体的に活動する授業づくりを行っている。	95			84.2				
	学力調査	①②③④⑤共に90%以上 【期末目標】 ③A評価60%以上 ④検証問題に取り組み、正答率80%以上を目指す。	① 学力の重点目標や具体的な取り組みは全教職員で共通理解し、目標を達成できるよう取り組みは徹底して行っている。	100			100			・③A評価が64.3%と、期末目標のA評価60%以上を達成することができた。夏の校内研修で、一問分析から見えた各教科の課題を共有し、中間・期末と定期的に取組の検証をしてきたことが達成理由と考える。 ・④国語・算数で重点単元を設定し、単元で身に付けた力を検証するための問題に単元末と学期末に取り組んだ(学期末達成率国語88%、算数89%)。身に付けさせたい力をより確実し、検証問題の分析をして取り組んだことがよかった。 ・⑤2学期からは定期テストの一問分析に加えて、定期テストごとに授業改善についての自己評価を行い、指導の改善につながるようになった。そのため肯定的な回答の割合が高くなったと考えられる。	③市学力調査の一問分析を行い、1月末に分析結果の共有会を持つ。来年度当初にも、分析による成果と課題を再度共有し、学力向上に向けた意識継続を図る。 ④来年度も授業改善・検証問題に継続して取り組む。検証問題がより有効なものになるよう内容を精査していく。 ⑤来年度も定期テストの一問分析と授業改革の自己評価を行い、授業改善につなげていく。年度初めの早い段階で前期課程とも研修を行い、小中で共通の課題意識を持ち、学力向上に取り組んでいく。
			② 学校力向上ロードマップにおける各目の役割を教職員が理解し、定期的な検証がなされている。	94.4			94.1				
			③ 校内で学力調査の結果や分析、成果や課題を共有している。(義務教育学校)	77.8			100				
④ 一問分析の結果を基に、授業の改善を行う。(前期)			55.5			85.7					
⑤ 定期テスト等で記述問題に取り組み、結果を分析し、指導の改善を行う。(後期)			88.8			100					
集計											
家庭学習	①を80%以上 ②を90%以上 ③を80%以上	① 自分で計画を立てて勉強している(3年以上)	100	81.1	73.8	100	80.7	69.6	①について ・保護者アンケートの肯定的な回答が中間評価より低下した。特に後期課程の保護者の回答において大きく低下している。 ②について ・前期課程では、高学年を中心に、学期末テストに向けた予定を示し、計画的に学習に取り組むことができた。2学期は、漢字50問テストで80点以上を点数でできた児童が9割を越えた。	①について ・家庭学習課題の提出の頻度を改め、細かく提出を確認し、日々の家庭学習を促す取り組みを行っている。またテスト前の家庭学習が充実するよう保護者とも協力していく。 ②について ・来年度も計画的な家庭学習ができるよう、小テストや学年末テストの予定を示していく。また、家庭学習の成果を高めるため、ドリルや自学の学習方法を見直し、具体的な方法を年度末に提案する。	
		② 児童生徒の家庭学習の評価・指導を行っている	94.4			94.1					
		③ 家庭学習による成果を実感している。	87.1			87					
		集計									